

鎮魂の夏

復興へ向かう
陸前高田市の今
(第四報)



日本赤十字秋田看護大学
佐々木亮平

(ささき・りょうへい 看護学部 助教)

(連絡先: 〒 010-1493
秋田県秋田市上北手猿田字苗代沢 17-3 018-829-4125
ryohei-s@rcakita.ac.jp)

I はじめに

岩手県陸前高田市(以下、市内または現地)での支援活動も4カ月が経ち、5カ月目に入りました。今回は、平成23年6月13日以降、現在(7月13日)までの約1カ月間の状況をご報告いたします。

今年は東北地方も平年より早い梅雨明けとなりました。現地も平年に比べ17日も早いという過去3番目に早い梅雨明けに戸惑いつつ、連日の暑さに体力・気力ともに奪い取られているような状況です。

発災以来、多くの支援チームの皆さまに支えられ進んできた現地ですが、7月10日をもって全体的な災害救助法

が一区切りとなったこと、避難所の多くが7月末で閉鎖となること等と相まって、一部の支援チームを除いて収束・撤退の流れが加速しています。これまで献身的に現地でご活動いただいた全国のチームの皆さまには、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

とすると、被災地以外では「祭りの後」のような雰囲気になっている、「節電の夏は始まったが、災害支援活動は終わった!?!」という声も聞こえてきているようですが、現地では何も終わっておりません。むしろこれからです。併せて住民の皆さんはもちろん、現地職員についても、これまでの4カ月でたまりにたまった心身の疲労に対し、しっかりとしたフォロー体制をとれるようにしていくことが、現在の重要な課題の一つとなっています。

これから震災後、初めてのお盆を迎えます。例年であれば東北の各地域に

根差した夏祭りは、一年で最もにぎやかな季節を彩ることになるのですが、今年は鎮魂・復興の意味合いも色濃くなり、まさしく鎮魂の夏となり、7月16日、17日に東北の六大祭りが集結した「東北六魂祭」が仙台で開催されました。被災地に限らず復興に向け活動し続けているすべての人たち一人ひとりに対しても、次のフェイズに変わるこの暑い夏を少しでも心静かに過ごせるよう期待と希望も含め、ご報告いたします。

Ⅱ よりよい状態を目指して

23年7月13日(被災から124日目)現在の死者は1531人、行方不明者は460人となりました。

念のためおことわり申し上げますが、この死亡者数は警察発表の数字で、市内外の方々と併せた数となっております。これまで、公衆衛生ねつと」をよ

くご覧になる読者の皆さまは既にお気づきで、いくつか指摘いただいておりますが、ここで数字の整理をすると、陸前高田市が発表している数字は「市民で身元が判明し死亡届が出された方」となっています。このため、前述した数字よりも小さくなっています。また4、5月に全国の支援チームの皆さまの協力で実施した全戸家庭訪問による「健康・生活調査」の結果の数字は、全体の約85%の内訳であり、かつ、あの時期に安否を確実に確認することのできた人たちの数字のため、訪問していただいた保健師の皆さまがそれ以上はお話を伺わなかった、もしくは聞けない状況にあった等の理由により、数としては400人弱といへん小さくなっています。いずれにしても、行方不明の人々も未だ数多くおられ、複雑な思いでお盆を迎えざるを得ない状況の皆さまが少なくありません。

避難者数は、23年7月12日(被災

とを意味していると思います。いわばプライマリヘルスケアの条件が今やっと整いつつあり、ここから復興が始まり、進めていけるようになったのです。

発災後、まだ日も浅かった時期に公益財団法人日本ユニセフ協会(UNICEF)のスタッフの言葉にハッとしたことがあります。「ここは日本(陸前高田)ではあるけれども、現在では発展途上国と同じような環境となっている。その環境下におけるノウハウを持つているユニセフを活用してほしい……」と。被害状況により考え方は異なるとは思うのですが、市街地の約86%が津波により壊滅状態となり、人口比約70%の方々が被災し、総世帯数の47・1%が全壊という陸前高田市では、まちを「元に戻す」という発想から「創りなおす」、そして以前よりもよりよい状態にする(Build back better)という考え方が共通認識になってきています。

Ⅲ インフラ(社会基盤)の重要性

震災により市内の大部分で水道が使えない状態が続いていましたが、6月26日(被災から107日)をもって市内全域で上水道が利用可能となりました。流水で手を洗えること、トイレが使用できること、震災前は当たり前のように行っていたことですが、時間がかかった地区では4カ月近くも不便な生活を強いられていたことになりました。これで単に衛生面だけでなく一人ひとりが精神的にもよい方向に一歩進んでいけると、私自身避難所で生活しながらの活動を踏まえ実感しています。

また、市内を流れる気仙川にかかっていた気仙大橋(市と宮城県気仙沼市方面とをつなぐ国道45号の大動脈)の仮橋が、予定よりも2カ月も早い7月10日(被災から121日)に開通とな

から123日)現在で1015人と、1000人を下回ろうとするとところまできました。このうち、いわゆる避難所での生活をされている避難者数は431人で、発災から4カ月が経った今もおおさまる理由により、暑さ対策も限られている避難所の過酷な環境下での生活を続けられています。市内最大の避難所で一時、1200人を超える人たちが避難していた高田第一中学校も200人を切り、7月末をもって市内の避難所は閉鎖となる方向(予定)で進んでいます。

このプロセスは大きなことではありますが、避難所がなくなればよいことといえばそうではなく、2000戸を超える市内仮設住宅や個人宅、市外避難所等にいわば一時的に移ったに過ぎません。いうまでもなく、これはフェイズの区切りではありませんが、最終的なゴールではなく本当の意味でのスタート地点によりやく立とうとしているこ

りました(図1)。津波により落橋し、一時、気仙沼市方面へは最大70キロメートルを迂回する必要がありました。が、市内においても被災が大きかった長部・今泉地区に住む住民の皆さんをはじめ、宮城・岩手両県にとって生活を支える貴重な橋(道路)がつかつたことになりました。これにより国道45号は、宮城県石巻市の一部を除いて仙

図1 気仙大橋仮橋を宮城県気仙沼市側から望む



左側が落橋した気仙大橋の土台、写真奥が陸前高田市中心市街地
※国土交通省三陸国道事務所記者発表資料から抜粋

表1 保健関連支援チーム総数推移（速報値）

（単位：名）	3月	4月	5月	6月
計（延べ）	693	2615	1638	1756
1日平均	36.47	87.17	52.84	58.53

は減少していくものと推測しています。今回の災害は、「未曾有の災害」とか、「1000年に1回の災害」等と表現されることが多いのですが、そうであるならば、それに対応する災害支援体制もこれまでのやり方や方法にとらわれず、それこそ1000

多くの支援をいただいてきましたが、6月末をもって収束・撤退したチームが複数あり、県内近隣の自治体による支援チームのほか、一部の県外からの支援チームが当面8月末まで残る体制となったものの、マンパワー的には先細りしていく見通しとなっています。なお、表1のとおり、発災以降、保健関連支援チームの総数推移（速報値）をまとめていますが、これも7月以降

年に1回の対応が求められていると感じています。被災直後から各方面でも指摘されているとおり、現行の仕組み、システムでは到底、太刀打ちできないのが今回の災害です。その中で多くの方々の熱意と工夫でこれまで進められてきたわけですが、避難者が仮設住宅に移り始めた結果、逆に被災者だけでなく地域の一人ひとりの課題が見えなくなってきました。

一方で派遣元の事情もあり「やることがない」と支援チームが引き上げているが、実は「やることがない」のではなく、「やることが見えない」「地域診断が十分にできていない」だけではないでしょうか。このままいくと史上類を見ない甚大な被害をもたらした今回の災害であっても、発災から半年程度で多くの支援チームが撤退しても乗り切れるという既成事実だけが残りかねません。撤退した後に残るのは現地職員だけです。現地職員だけでその

後、進めていくことができるでしょうか。発災から4カ月経過した今なお、新たに休職を余儀なくされている現地職員がいることが何よりその難しさを表しているといえます。今、市内には陸前高田市の復興の象徴として被災直後から連日報道されている「奇跡の一本松」があります。日本百景や日本の渚百選など名勝として知られた高田松原にあった7万本もの松の中で唯一、生き残った樹齢250年を超える松です（図2）。しかし、

図2 奇跡の一本松



※陸前高田市教育委員会ホームページから抜粋
http://www1.iwate-school.jp/rikuzen/takata/index.php?page_id=0

IV 奇跡の一本松とともに

前述のとおり、全国からの医療や保健等支援チームの収束・撤退が加速し、市内における支援体制もこの1カ月で大きく変わってきました。医療の動きとしては、まず、高田第一中学校内において発災以来24時間体制で救護所を

開設してきた日本赤十字社が、6月24日（被災から105日）に同中学校敷地内体育館側に建設したプレハブ棟に移転しました。これまでは全国の各支部による複数チームの交代制で運営してきましたが、今後は原則、岩手県支部が日中の時間帯だけ開設することとなっています（19時～翌7時の救急対応あり）。

その他、市内に開設されていた各救護所や巡回診療も次のとおり順次、診療を終了しています（予定）。竹駒地区6月30日（被災から111日）、下矢作地区7月5日（被災から116日）、長部地区7月15日（被災から126日）。これにより、日本赤十字社の救護所以外は、被災により仮設診療所（病院）として診療を開始している米崎地区の県立高田病院、高田地区の鶴浦医院、小友地区の鳥羽医院、広田地区の広田診療所の4カ所と、直接、津波の被害は受けなかった内陸部

（高田地区）の希望ヶ丘病院（精神科）、同じく内陸山間部・二又地区の二又診療所の2カ所となりました。特に基幹病院である県立高田病院は、現在米崎地区コミュニティセンターを間借りする形で診療を継続しているのですが、7月20日ころをめどに仮設のプレハブ棟が完成するのを待って、本格的な外来診療を開始する予定となっています。

なお、当面は外来機能だけで、入院機能は未定となっています。今後は在宅医療（訪問診療）の対象者が震災前の5倍以上に増加していることから、引き続きどのくらいの数まで増えるか見極めながら、逆に市内に2カ所ある訪問看護ステーションの対象者数が震災前の半分以下になっている状況も踏まえ、十分に連携を図りながら進めていくことで保健関連チームとも確認を行っています。

保健関連チームもこれまで全国から

復興のシンボルになったものの、傷みが激しいため、保全作業やクローンによる再生など関係者による必死の支援活動が続けられています。この一連の保全活動に、保健関連支援チームの活動も重ね合わせて見えてくるがあります。つまり、奇跡の一本松は今までに枯れそうになりながらも一から新しい命をつなげ、自ら生きようとしています。同様に現地職員の皆さんも、今は全国の皆さんからの応援をいただきながらも、最終的には自分たちで進めていけるよう必死に今を生きておられます。一本松もこの夏が正念場といわれていますが、保健関連支援チームを中心とした現在の体制もここから1、2カ月がその後につながる一つの正念場になっていく気がします。

V 情報のデータベース化とリンク

これまでも何度かご紹介した「健

康・生活調査」の結果報告書は、岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学講座の坂田清美教授や同大学歯学部口腔保健育成学講座の相澤文恵助教の全面的なバックアップとご支援のもと、公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長の岩室紳也先生にご協力いただき、7月3日に公衆衛生ねつとりに公開させていただきました。全国からの保健師チームの皆さんにご協力いただき実施した内容が、この時期にこうしてしつかりとデータベース化できたことは、今後の活動を展開していく上でも非常に意義深いことだと思えます。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

今後は、現在なお続けられている2、3次スクリーニングの結果や仮設住宅へ移られてからの全戸訪問の結果の内容についても同じフォーマットでリンクできようになることが望ましいと考えています。しかし、率直なところ、

この方法論はまだ議論さえもできていない状況です。仮設住宅への訪問で集積されたデータと、それまでの震災直後の基礎データとつなげることで必然的に今後の活動方針が見えてくると思っています。

また、坂田教授が厚生労働省科学研究費補助金特別研究事業として実施する「東日本大震災被災者の健康状態に関する調査」についても、陸前高田市の特定健診とタイアップしながら今後10年程度の長期にわたり追跡調査をしていけるよう現在調整していることから、同様にデータをリンクできるようなしていくことが重要です。言うまでもなく情報は情報として活用されて初めて価値を持ちます。震災直後の混乱期も含め、それぞれが持っている情報をつなげながら地域診断していくことが、とても初歩的で基礎的なことではありますが重要な活動だと思っています。

VI 入魂の復興計画を

3月末から続けている保健医療福祉の包括ケア会議も、7月2日（被災から113日）で第10回を数えました。7月からは、それまで2週間に1回のペースで開催してきましたが、フェイズが変わってきたことに合わせて月1回で開催することとしました。会議の目的も、今までは情報共有・交換を第一義的にしていましたが、それらを踏まえた上で、今後（短期・中期・長期）をどうしていくか、どう考えていくかについて議論できる時間を少しずつ増やしています。前回、ご紹介した「陸前高田市保健医療福祉未来図（復興計画）」の「たいていちょうたい」についても、各支援チームの皆さんからご意見をいただき、随時更新、公開し続けています。

そしてこの復興計画を基に市全体の

図3 陸前高田市健康推進課内における復興計画会議の様子（7/1）



現地職員に長期支援の名古屋市、一関市と神戸市、岩室先生とともに実施

復興計画の策定についても具体的に動き出しています。信じたことかもしれませんが、これまでは現地職員の皆さん同士でゆつくりと陸前高田市の保健医療について話し合い、打ち合わせをする時間を持つことができませんでした。4カ月が経とうとしている今、ようやく、少しずつですが陸前高田市のこれからを考え、語り合うことができるようになり、先日も健康づくりに関連する復興計画について初めて関係職員が一堂に会した会議を開催できま

した（図3）。そのくらい、震災以来、現地では目の前のことに追われる毎日が続いているということの裏返しだと私は感じています。もちろん、現在練っている復興計画はまったくの素案、たたき台であり、今後、市民の皆さんにもご意見をいただきながら、最終的には今年の11月ころをめどに完成させる予定で進められています。現時点での保健医療分野に関連する復興計画の概要は次のとおりです。

- ◆復興計画における復興基本政策（保健医療分野）
保健・福祉・介護・医療の総合的なシステムに支えられた市民一人ひとりの居場所・陸前高田市を構築する
- ◆具体的施策
 - 1 一人ひとりが健やかに暮らせる居場所づくり・健康づくりの推進のための体制整備
 - 2 保健事業の再開と推進（被災状況別、ライフステージ別、分野別）
 - 3 保健医療福祉集中化エリアの創設（市保健福祉総合センター（仮称）等の拠点整備）
 - 4 地域包括医療システムの構築
 - 5 安心できる診療体制の確保に向けた地域医療施設の整備（ハード面）

一人ひとりが安心できる居場所とは、健やかなときはより健やかに、こころや身体に病や障がいを抱えても、その人らしく暮らし続け、豊かな人生を実現できる地域、空間、陸前高田市のことです。未来の居場所づくりのため、住居、仕事面から生活を充実させる一方で、一人ひとりの健康づくりを、病気を、障がいを支えつつ、地域のコミュニティ・絆を回復させることが求められています。そのためにも、ネットワークの要としての行政機能を早期に回復させ、「自助、共助、公助」のもとでの居場所づくり、地域づくり、健康づくりを展開していきます。なお、この計画策定にあたり、仮設住宅への移転等の完了を念頭に置いた、今後の復興に向けたタイムスケジュールを次のとおり設定しています。

【平成23年度半ばまで】

「応急対策期」を開始する事業

【平成25年3月まで】

「復興対策期」を開始する事業

【平成25年4月以降】

「復興対策期」を開始し将来目標である「未来期」を目指す事業

これらの素案は、現地職員の皆さんの声をできるだけそのまま使い、積み上げ・整理する形で作成しています。今後またたかれないながら、形は変わっていくと思いますが、一番大切なのは、やはり現地の皆さんの魂がこの計画の中に入るのだと思います。文章だけきれいに並べて整理されても、まったくの絵に描いた餅になりかねません。試行錯誤しながらも皆さんとともに創り上げていくその過程（プロセス）に一つの重要な意味があり、復興計画に魂が宿ることにつながるのだと信じています。

Ⅶ 公助と公助をつなぐもの

これまでも繰り返し申し上げてきま

したとおり、今回の災害は、いわゆる公助（行政機能）が機能不全を起こしただけでなく、現行の体制では公助の中だけで機能不全を起こした行政機能を回復させることが非常に難しい事態が起こりました。被災地（現地）の自治体と、外部からの公助（支援自治体チーム）だけでは解決できない問題がいくつもあつたのです。そこにいわば勝手にきた公助（行政）ではない私や岩室先生のような存在が、現地と支援チームをつなぐ役割を担っているものと感じています。これは、災害時は、良いか悪いかという発想ではなく、できるかできないかの発想で、できる者が進めていかざるを得ないことを意味していると思います。

震災5日目の3月16日以降、私や岩室先生が継続して行っている活動は、一貫して保健医療福祉分野における調整・統括機能の後方支援です。現地に

Ⅶ 鎮魂の夏

入り続け、調整・統括するということが現地のスタッフには「やりたくてもできないことを形にする」という具体的な支援になり、その後の方向性（デザイン）を見出す力へとつながっていると感じています。人と人とのつながりという活動を評価することは極めて困難ですが、情報も含めて公衆衛生を背景とした専門の統括チームが地域全体を俯瞰して調整できることは災害時、非常に重要なことだと考えます。

阪神淡路大震災を契機にDMAT（災害派遣医療チーム）の制度が確立したように、行政機能も被災・機能不全を起こした今回の東日本大震災を契機に、DPAT（Disaster Public

Health Assistance Team：災害派遣公衆衛生チーム）に関する方向性を打ち出すことが急務となっています。今後、現在の活動が続けながらDPAT構想に向けた検証も行っていきたいと思っています。

震災から4カ月が経ち、暑い夏が来しました。例年であれば、盆供養も兼ねた陸前高田市の伝統の夏祭り（うごく七夕・けんか七夕）が開催され、短い夏を過ごすはずでした。900年以上の伝統を持つとされるこの夏の行事は毎年、いろいろな人の思いの中で続けられてきたと思います。今年は、その夏祭りも開催が危ぶまれていました。が、規模は縮小せざるを得ない状況の中で、残った山車に付ける飾りを作成し、鎮魂と復興の思いを込めて8月6、7日に行われる予定です。

この夏祭りは亡くなった方々の魂を鎮めるという意味はもちろんですが、現地の皆さんの気持ちも鎮めるという意味もあると思います。ぜひそうあってほしいと個人的には願ってやみません。あの日、現地に居た人にしか分か

らない思いがあるはず。これまで築き上げてきた歴史や文化、故郷が目の前で流されていくという経験はそう簡単に言葉にできるものではないと思います。ましてや多くの方々が犠牲となっています。この4カ月間、話せずに過ごしてきた方が多いのではないのでしょうか。職員もそうです。「がんばろう」と励まされ、頑張り続けてきた結果（無理）が、今出てきているように感じます。純粹に休む時間や、本音を聞く時間、認める時間、ほめたたえる時間、そういう時間が今まではなかったように思います。夏祭りだけでなく、そういう時間をこの夏を機に意識してつくっていききたいです。引き続きよろしく願っています。

- 1) 公衆衛生nett（<http://www.koshu-eisei.net/>）内「陸前高田市のいま」
<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakata.html>（アドレスを変更しています）